The study of teaching materials for Chinese poetry: Reading deeply Wang Wei 'The farewell'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: HARADA, Ai メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00058243

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

漢詩教材研究 ―王維「送別」を読み解く―

The study of teaching materials for Chinese poetry : Reading deeply Wang Wei 'The farewell'

原田　愛
Ai HARADA

はじめに

中等教育の国語科漢文教材は唐代の名詩が多く採用され、また、昨今は日本の漢詩もしばしば取り上げられている。その際、漢詩の①白文（漢字のみ使った原文）に②訓点（返り点などの符号や送り仮名、句読点）が字間や行の脇に小書きで書かれており、概ねそれに沿って③訓読（書き下し）を行い、④語句や語法を学んで読解し翻訳することになっているが、国語科の教材としては、④の読解・翻訳が読解力・表現力の向上において重要であろう。

以前、李白「山中問答」を教材として取りあげ、知識や読解力、表現力等の向上に繋がる授業の方法として次の方法を考えた。[1]

(A)詩の語句や平仄・押韻・拼音（ピンイン）を漢和辞典で調べ、現代中国語で音読し、リズムや響きとともに内容構成を理解する
(B)文人の翻訳を鑑賞する～英訳による読解と表現
(C)文人の翻訳を鑑賞する～日本の文人による読解と表現
(D)詩の「典拠」を読み、読解に深みを持たせる

今回、同じく盛唐の詩人である王維の「送別」を教材とし、以上の四つの方法も踏まえつつ、更に新たな授業の展開を考えたい。[2]

一、王維「送別」について

王維（六九九～七六一、字は摩詰）の「送別」は、教科書における採用は少ないものの、王維の詩の中でも屈指の名詩として名高く、『唐詩選』（ピンイン）にも採られている。[3] まず、(A)詩の語句や平仄・押韻・拼音を漢和辞典で調べ、現代中国語で音読し、リズムや響きとともに内容構成を理解する方法によって、詩を読んでみたい。王維「送別」は平仄から「五言古詩」に分類される。また、脚韻の「之（zhī）」「陲（chuí）」「時（shí）」を確認して中国語で読んでみることで、全体のリズムと押韻の効果を聴覚で感じ取ることが可能であろう。また、実は訓読・翻訳については、幾つかの説がある。前野直彬氏が『唐詩選（上）』の「送別」[4]の語注において、わかりやすく詳細に解説しているので引用する。

令和元年9月30日受理

（盛唐）王維「送別」（『王右丞集箋注』巻三）

1 ●xià ●mǎ ●yìn ○jūn ●jiǔ
下馬飲君酒　馬より下りて君に酒を飲ましめ、

2 ●wèn ○jūn ○hé ●suǒ ☆zhī …上平七之
問君何所之　君に問ふ　何くにか之く所ぞと。

3 ○jūn ○yán ●bù ●dé ●yì
君言不得意　君は言ふ　意を得ず、

4 ○guī ●wò ○nán ○shān ☆chuí …上平五支
歸臥南山陲　南山の陲に帰臥せんと。

5 ●dàn ●qù ●mò ●fù ●wèn
但去莫復問　但ただ去れ　復た問ふこと莫し、

6 ●bái ○yún ○wú ●jìn ☆shí …上平七之
白雲無盡時　白雲　尽くる時無からん。

1 別れにのぞんで馬から下り、君にはなむけの酒をすすめた。
2 私は問う「君はこれからどこに行くのか」と。
3 君は答える「世の中が思うようにならないから、
4 南山の片すみへ帰って引きこもるのさ」と。
5 では行きたまえ、私はもう君に何も問うまい、
6 君が行く南山では白雲が尽きる時もなく湧きおこっているだろう。

○何所之　之はある地点へ行くこと。どこへ行くのか。もっとも行くさきは作者にもわかっているはずで、この質問は「どうするのか」、すなわち下の「帰臥」という答えを引き出すような気持を含む。○不得意　思うようにならない。官吏登用試験に落第したか、官界での出世が順調にゆかないことを意味する。○帰臥　帰ったきり引きこもる。隠棲する。○南山　終南山のこと。長安の南にある山。○陲　はずれのあたり。片すみ。○但去莫復問　但は下の字を強調する言葉。この一句には昔から三通りの解釈がある。これ以上君にたずねることはしまいととるもの、世俗のことなど問題にするなととるもの、および全体を「君」の言葉と解して、作者に向かい、もう何もたずねずに帰ってくれと言ったととるものである。いまは第一の解釈をとっておく。○白雲　王維の詩では山中の生活を象徴するものとして、しばしば使われる。たとえば「悠然たり遠山の暮、独り白雲に向かって帰る」（輞川に帰る作）。

つまり、5句目の「問」の意味および5・6句目を誰の言葉と取るかで、詩の解釈が変わるのである。先に挙げた例示では、第一の解釈を基に訓読・翻訳した。第二の解釈では、第一の解釈と同様に、5・6句目は送る側である視点人物による「君」への言葉であるが、「問」の主語や意味が異なるため、訓読はそのままに次のように訳すことになろう。

5　では行きたまえ、君はもう俗世間のことなど問題にしてはならぬ。
6　君が行く南山では白雲が尽きる時もなく湧きおこっているだろう。

また、第三の解釈では、3句目から6句目までが「君」の言葉となるため、言葉の終わりに付す「と」が4句目ではなく6句目の末に来ることになり、訳もまたそれに合わせて、

3　君は答える「世の中が思うようにならないから、
4　南山の片すみへ帰って引きこもるのさ。
5　さあ君は俗世間へと戻って行ってくれ、もう私に何も問うてくれるな。
6　私の行く南山では白雲が尽きる時もなく湧きおこっているのだから」と。

となる。但し、視点人物（詩の作者であることが多く、「送別」もそれに該当する）が自らの思いを表明せずに詩が終わることはあまりないため、第三の解釈が採られることは少ない。

また、前野氏も述べているが、「白雲」は「山中の生活」、即ち隠逸の象徴であり、これは六朝の斉・梁の頃の隠者である陶弘景の詩に「山中何所有、嶺上多白雲（山中何の有る所ぞ、嶺上白雲多し）」とあるのに拠る（この詩については後述する）。そして、王維「送別」の6句目「白雲無盡時（白雲尽くる時無からん）」は、山中における情景描写でありながら、同時に隠逸を求める心情の比喩でもあった。この思いは帰隠する「君」だけでなく、「君」を送った作者の心にも湧きおこっているのである。こうして全体の文脈を見たり、そして、別の作品と併読したりすることで、「送別」は読み解くことが可能になるのである。

二、詩の主題を考える――送別と隠遁

王維「送別」の主題は「送別」であり、また、「隠遁」である。まず、王維には他にも送別詩があり、例えば、王維「送元二使安西（元二の安西に使ひするを送る）」などは、多くの教科書に採用された代表的な送別詩である。かかる同一作者の主題を同じくする名作を取りあげて比較するのも読解を深める手段である。

(E) 同じ作者の同じ主題の作品をあわせて読み、比較する

王維「送元二使安西」は、使者の任を帯びて安西（今の新疆の庫車、唐代に安西都護府が置かれ、西域の守護を担った）に旅立つ元二（元が姓、二は排行で二番目ということ）という友人に送った詩である。渭城曲・陽関曲・陽関三疊など「楽府」としての別名があり、後世、別れの宴で歌われたという。「渭城」は長安の渭水を挟んだ向かい側の町咸陽の別名であり、西北方面に旅立つ人をここまで見送る風習があった。「陽関」は敦煌の西南にある関所のことで、古来西域との境界に在って重要視された。

（盛唐）王維「送元二使安西」（『王右丞集箋注』巻十四）

1　渭城朝雨裛輕塵　　渭城の朝雨　軽塵を裛し、
2　客舎青青柳色新　　客舎青青　柳色新たなり。
3　勸君更盡一杯酒　　君に勧む　更に尽くせ　一杯の酒、
4　西出陽關無故人　　西のかた陽関を出づれば故人無からん。

1　渭城の朝の雨は細かな土ぼこりをしっとりと濡らし、
2　宿の柳が青々と鮮やかな色合いになった。
3　さあ君もう一杯酒を飲みたまえ、
4　西へ行って陽関を出てしまえば一緒に酒を酌み交わす友はいないのだから。

石川忠久氏はこの詩を次のように評している。(7)

前半二句は、すがすがしい雨上がりの春の朝の情景。昨夜、長安から元二を送ってこの渭城の町へやって来て、別れの宴を催して、今朝はいよいよお別れ。宿屋の前の柳の芽は雨に洗われて目にしみるように青々としている。中国では昔から別れの場面に柳がつきものだが、ここでも印象的に使われている。秋の夕暮れのさびしい雰囲気も別れにふさわしいのだが、この詩は「朝雨」と逆にいった趣向であり、後半の送別の情を際立たせている。

後半二句。昨夜は遠くへ旅立つ元二と心ゆくまで酒を飲んだ。だが、いよいよ出発の今となれば、また別れのさびしさがこみ上げてくる。「更に尽くせ一杯の酒」この句の「更」の字が非常によく効いている。「もう一杯」の重みが迫ってきて、尽きせぬ名残りが朝の情景の中に余韻となってただよう。

王維の「送別」と「送元二使安西」を「友人への送別」という同一主題の作として読み比べたとき、「送別」には所謂「別れのさびしさ」や「尽きせぬ名残り」という悲哀の要素が薄いこと、却って「君」を隠棲の地である終南山に送り出そうという強い意志があることが判る。これは、自ら終南山に帰隠せんとする「君」と、安西に使者として行かねばならない「元二」という別れゆく相手の事情に拠るからであろう。このように、同じ作者が同一の主題で詠んだとしても、各詩の内容や状況は異なるものである。その相違点を比較し分析することで、詩の表現の面白さや奥深さを理解できる上、作者の思いや性格までも見えてくるのである。

ただ、吉川幸次郎氏に「やさしい、こまやかな神経のもちぬし」(8)と評される王維が「送別」において、「君」にここまで強い意志を示したのは、そうした送別する相手の事情だけが原因だろうか。前野直彬氏は先に挙げた『唐詩選（上）』において、王維「送別」を次のように紹介している。

旅立つ友へおくる、はなむけの詩である。友人の名はわからない。作者の親友であった詩人孟浩然に「歳暮、南山へ帰る」という詩があるので、この友人は彼のこととする説もあるが、確実ではない。また作者の別荘も南山のほとりにあるから、この詩全体が架空の対話であって、送るもの送られるもの、ともに作者の分身であろうと見る説もある。

つまり、王維「送別」は帰隠する友人に詠んだ詩とするか、自

らを送る詩とするかで分かれるという。小川環樹氏等による『王維詩集』も、「送別」について「この詩は実は心境を語るために自問自答した架空の送別詩であるかもしれぬ」と解説する。[9]

因みに、ここに挙げられた孟浩然（六八九～七四〇）は、王維より十歳年上の親しい友人でもあった。王維と同じく盛唐の自然詩人として名高く、後に「王孟」と並び称された。しかし、孟浩然は科挙に落第し、更には、縁故による官職も得られなったため、結局、故郷の襄陽に帰隠することを決めた。その別れの際、王維は「送孟六歸襄陽（孟六の襄陽に帰るを送る）」という送別詩を孟浩然に寄せ、孟浩然も王維に「留別王侍御維（王侍御維に留別す）」という留別詩（旅立つ人があとに残る人に寄せる詩）を贈ったと言われる。[10] この「五言律詩」の送別詩が教科書に採られたことはないが、王維と孟浩然の交遊の一端が窺える作でもあり、また、帰隠する友人を送別するという同一主題の作であるため、ひとまず取り上げて比較したい。

王維は1・2句目において、距離においても時間においても俗世間から遠く長く離れることが隠遁であるとし、3・4句目でそれを孟浩然に「長策」として勧める。更に、5・6句目で酒と読書に耽る自由で安楽な隠遁生活を具体的に描写し、それを「好是一生事（好し是れ一生の事）」と評し、権力者に作品を献じて認めてもらって官職を得ようとする愚を犯さないでほしいと祈念して結ぶ。王維は、孟浩然の故郷に帰って隠棲するという選択に、深い共感と賞賛の意を表明したのであり、失意の孟浩然を慰め、激励せんとした思いが窺える。

この詩と比べると、同じく隠遁する友人を送る詩である「送別」の「但去莫復問（但だ去れ　復た問ふこと莫し）」は、激励としても些か厳しすぎる表現と言えよう。しかし、前野氏が云うもう一つの説のように「送別」が自らを送る詩とすれば、その強い意志を向けられた「君」は王維自身ということになる。

（盛唐）王維「送孟六歸襄陽」（『王右丞集箋注』巻十五）

1 杜門不欲出　門を杜ざして出づるを欲せず、
2 久與世情疎　久しく世情と疎なり。
3 以此爲長策　此を以て長策と為せば、
4 勸君歸舊廬　君に勧めて旧廬に帰らしむ。
5 醉歌田舍酒　酔ひて歌ふ　田舎の酒、
6 笑讀古人書　笑ひて読む　古人の書。
7 好是一生事　好し是れ一生の事、
8 無勞獻子虛　労する無かれ　子虛を献ずるを。

1 門を閉じて世間に出ようとせず、
2 長く世情と疎遠になる。
3 これこそが良策と思うから、
4 君に故郷の廬に帰ることを勧めるのだ。
5 田舎の酒に酔って歌い、
6 古人の書物を喜んで読みふける。
7 これぞ一生行うべきこと、
8 どうか司馬相如のように「子虛の賦」を献上して職を求めるなんてことはしないでくれ。

三、詩の連関と主題の広がり

ところで、以前、拙稿において李白「山中問答」の読解を行った際、(D)詩の「典拠」を読み、読解に深みを持たせるという方法を紹介したが、それは王維「送別」でも有効である。「送別」の主な典拠の一つは、第一章で言及した陶弘景（四五二～五三六）の詩「詔問山中何所有、賦詩以答（詔して「山中何の有る所ぞ」と問はれ、詩を賦して以て答ふ）」である。[11]

（六朝楽）陶弘景「詔問山中何所有、賦詩以答」
（『古詩源』巻二十三）

1 山中何所有　　山中何の有る所ぞ、
2 嶺上多白雲　　嶺上白雲多し。
3 只可自怡悅　　只だ自ら怡悅すべきのみ、
4 不堪持寄君　　持して君に寄するに堪へず。

1 「山の中に何があるのか」とご下問があり、
2 「高い嶺に白雲がたくさんございます。
3 それはただわたしが見て楽しむことができるだけ、
4 ご持参して宮中の御主君にお届けすることは叶いません」
とお答えした。

陶弘景は、世俗を離れて建康の東南にある句容の茅山に隠棲し、斉の高帝（蕭道成）の出仕要請も断っていた。そこで、高帝は陶弘景に山中の楽しみを問い、陶弘景はそれを「白雲」であると答えた。この「白雲」は、俗界の人には何の価値もないが、自分にはこの上なく楽しいもので、俗界には持って行くことは出来ないものであるという。王維の「送別」の6句目に見える「白雲」はこの思想を継承しており、目加田誠氏は「この詩（陶弘景「詔問山中何所有、賦詩以答」）から奪胎して来たものかとも考えられるが、これ（王維「送別」）は更に淡白であり妙味がある」と評した。[12]

また、もう一つの重要な典拠として「古今隠逸詩人の宗」と称えられた東晋の陶淵明（三六五～四二七）の「飲酒二十首」其五が挙げられる。この詩は陶淵明の代表作として名高く、夏目漱石の『草枕』の冒頭に引用されたことでも有名であり、幾つかの教科書にも採用されている。[13]そして、この「飲酒二十首」其五が「送別」を「自らを送る詩」とする根拠の一つになるのである。

陶淵明は山中に隠れ棲むのではなく、俗世間に接する「人境」に廬を構えた。その環境で何故そのように隠逸の境地を持てるのかと問われ、「心」が俗事から遠ざかると、「地」、即ち住む場所、取り巻く環境も自ずと辺境同然の静寂なものとなると説いた。心の在り方が環境に作用するというのである。

但し、松枝茂夫・和田武司両氏の『陶淵明全集（上）』がこの3句目の「問君（君に問ふ）」を「君は作者を指す。自問自答である」と解説するように、[14]これは実際の問答ではなく、自分の思いを表明するための様式である。4句目に云う「心」と「地」の様子は5～8句目に詳しく描写され、かかる自然と精神が一体化した中にこそ言葉では説明できない「真意」が有ると詠まれる。松浦友久氏は、この「真意」について次のように評した。[15]

この詩が淵明の代表作となりえたのは、かれが求めつづけた真実の意境――精神の真実なる在りかた――が、輪郭はおぼろげながら、確かにここに提示されていると感じられるからであろう。作者は「此の中に真意有り」といいながら、「弁ぜんと欲して已に言を忘る」と結んでいる。言葉によって弁

（東晋）陶淵明「飲酒二十首」其五（『陶淵明集』巻三）

1 結廬在人境　　廬を結びて人境に在り、
2 而無車馬喧　　而も車馬の喧しき無し。
3 問君何能爾　　君に問ふ　何ぞ能く爾ると、
4 心遠地自偏　　心遠ければ地も自ら偏なり。
5 採菊東籬下　　菊を採る　東籬の下、
6 悠然見南山　　悠然として南山を見る。
7 山氣日夕佳　　山気　日夕に佳く、
8 飛鳥相與還　　飛鳥　相ひ与に還る。
9 此中有眞意　　此の中に真意有り、
10 欲辨已忘言　　弁ぜんと欲して已に言を忘る。

1 さわがしい人里に廬を構えているが、
2 役人どもの車や馬の音に煩わされることはない。
3 「君に問いたい、どうしてそのようにしていられるのか」と言われたが、
4 それは心が世俗から遠く離れているため、住む場所も自然と僻遠の趣になってしまうからだ。
5 東側の垣根のもとに咲いている菊の花を手折りつつ、
6 ゆったりとした気持ちで、ふと頭をもたげると、南方はるかに廬山のゆったりとした姿が目に入る。
7 山の景色は夕暮れが格別にすばらしく、
8 飛ぶ鳥も連れ立って山のねぐらに帰って行く。
9 この中にこそ人生の真意が有るように思われる、
10 しかし、それを説明しようとしたとたん、言葉などもう忘れてしまった。

別的に説明することが不可能な境地として、読者にも直観的な理解を求めているのである。作者の実感であるとともに、巧みな詩的修辞といってよい。

そして、問いかけの「問君（君に問ふ）」と「南山」の字句、問答形式の構成などから、王維がこの陶淵明詩を意識して「送別」を詠んだことは明らかである。かつ、この陶淵明詩が典拠であることに則れば、視点人物を反転させて問いかける側にしているが、「送別」もやはり自問自答の詩であり、また、「送別」において王維の「真意」、即ち「求め続けた真実の意境」はいつまでも尽きることのない「白雲」に象徴されたことが判る。

また、「送別」を「自らを送る詩」とするもう一つの根拠となるのが関連作である。詩というのは、送った相手が応酬したり、作者が続編の作を詠んだりすることがあり、そうした関連した作品をあわせて読むことで、より深い読解をなし得るものである。

(F) 関連する作品をあわせて一緒に読む

「送別」においては、同じく王維の「終南別業」が関連作であることを松原朗氏が指摘している。[18]「送別」と「終南別業」のどちらが先に詠まれたかは不明であるが、平仄から「終南別業」もまた「五言古詩」であることを指摘したい。

王維は「中歳」、即ち三十歳頃に仏道を好むようになり、その結果、「晩」、即ち四十代で終南山の片すみに別荘である輞川荘を持ち、しばしば通うようになった。彼はその山中の別荘には一人で行き、そこで「勝事」、即ち自然の美しさを改めて発見する。「獨（独り）」も「空（空しく）」も一人で行うことを表すが、河川や雲などの自然の根源の美を探求する5・6句目の具体的な

描写から、却って一人であることを楽しんでいたことが窺える。そんな王維も時には山中で木こりと出会って話すことがあった。古来、木こりや漁師は隠者の仲間である。そんな木こりとの語らいは、いつまでも終わらないほど楽しいものであったという。

（盛唐）王維「終南別業」（『王右丞集箋注』巻三）

1 中歳頗好道　中歳　頗る道を好み、
2 晩家南山陲　晩に家す　南山の陲。
3 興來毎獨往　興来たれば毎に独り往き、
4 勝事空自知　勝事　空しく自ら知る。
5 行到水窮處　行きて水の窮まる処に到り、
6 坐看雲起時　坐して雲の起こる時を看る。
7 偶然値林叟　偶然　林叟に値ひ、
8 談笑無還期　談笑して還る期無し。

1 中年になっていささか仏道を好むようになり、
2 晩年に南山の片すみに別荘を構えた。
3 感興が湧くといつも一人でそこへ出かけているが、
4 ここの自然の美しさはわたし一人が知るばかり。
5 川の流れの源の処まで歩いたり、
6 雲の湧きおこる時をじっと眺めたりする。
7 時にはふと木こりのおじさんに出会い、
8 そのまま楽しく語らって帰る時間を忘れることもある。

つまり、王維は、俗世間の喧噪から離れた静寂な空間で、自然の美しさやその中で生きる賢人に対しながら、一人仏道を修めていたのであった。

そして、この詩の2句目「晩家南山陲（晩に家す　南山の陲）」、6句目「坐看雲起時（坐して雲の起こる時を看る）」を見れば、「送別」の4句目「歸臥南山陲（南山の陲に帰臥せん）」、6句目「白雲無盡時（白雲　尽くる時無からん）」と呼応していることが判る。松原氏は次のように論じている。

この詩（王維「終南別業」）は、隠遁を主題としている点で、帰隠を送別する「送別」詩と同じ意識の基盤の上にある。しかも注目すべきは、二つの具体的な点で「送別」詩と脈絡を通じていることである。

第一に、この詩の題が『国秀集』[11]に「初至山中」とあることは、とりわけ重要である。この詩題に拠れば、この詩は、終南の別業に移り住んだばかりの時期の制作となるからである。「送別」詩が王維の自送の詩であると解釈するとき、「終南別業」詩との関連は最も明瞭になる。王維は「送別」詩によって自分自身を、名利の価値に拘われる官人の世界から、南山の陲りなる絶対自由の世界に解き放つ。そしてこの「終南別業」詩は、王維が目指した絶対自由の世界を、実地に確認することを主題とする詩となる。こうして二篇の詩は、相い表裏する関係に置かれることになるであろう。

第二に、その表裏の関係を物語るかのように、この二首には字句の相関を認めることができる。すなわち「晩家南山陲」の句は、「送別」詩の「帰臥南山陲」と明らかな対応関係に置かれている。「南山陲」の三字を同じくするのは、

王維の詩中においてこの二篇だけである。しかも「送別」詩では、なお期待の中に止まっていた「白雲無尽時」という白雲に象徴される絶対自由の境地は、「終南別業」詩では「坐看雲起時」の句と姿を変え、ここに目睹の光景となって自分の世界の中に獲得されるのである。主題の共通性に加えて、このように字句上にも認められる相関は、単なる偶然の結果を超えて、制作に当たった作者の「意識の継続」を反映すると考えることが必要になるだろう。

このように、「隠遁」という主題とそれを象徴する字句の「南山陲」、「(白)雲」が「送別」と「終南別業」を繋ぐものであり、「送別」の「君」が後に如何に過ごしたのかが「終南別業」に描かれていると言えよう。そして、「送別」の5・6句目「但去莫復問、白雲無盡時(但だ去れ 復た問ふこと莫し、白雲 尽くる時無からん)」という、他の王維の送別詩には見られない強い意志的な言葉が王維自身に向けられているとすれば、そこから彼の仏道に対する姿勢や、友人に細やかな優しさと配慮を示す一方で、些か潔癖で自分に厳しい性格が見えてくるのではないか。

四、詩の後世への影響と新たなる表現への昇華

唐の名詩は後世に大きな影響を与えた。そして、後世の文人たちはその唐詩に感銘を受け、時にはそれを典拠としながら、新たな表現を模索した。そのようにして創作された作品をあわせて読むことで、どのような人物がどのように受容して創作したのかを知ることができる。

(G) 影響を受けた後世の作品をあわせて一緒に読む

王維「送別」も名作であるため、多くの文人に影響を及ぼしたが、ここでは日本における受容を幾つか紹介したい。

(日本江戸) 良寛「無題(仮称)」(『草堂詩集』天巻)

1 城中乞食了　城中 乞食を了へ、
2 得得攜囊歸　得得として嚢を携へて帰る。
3 歸來知何處　帰り来たるは 知んぬ 何れの処ぞ、
4 家在白雲陲　家は白雲の陲に在り。

1 町の中での托鉢を終えて、
2 てくてくと頭陀袋をかかえて帰る。
3 さてわたしの帰る処は一体どこなのか、
4 我が家は白雲の湧きおこる山の片すみに在るのだ。

この詩は題の無い作品のため、本稿では仮に「無題」とした。[18] 平仄から「五言古詩」に分類される。作者の良寛(一七五八～一八三一)は江戸後期の曹洞宗の僧で、和歌や書、漢詩にも秀でており、そこで独自の境地を開いたと言われる。ここで取り上げた詩も、1・2句目に町中で托鉢を終えて歩いて帰る日常的な情景を描写した後、3句目に「歸來(帰り来たる)」という陶淵明「歸去來兮辭」を連想させる字句を用いながら、自分が帰るべき処はどこなのかと自問する。そして、4句目にて、帰る家は「白雲」の湧きおこる山の「陲」に在ると答えて結ぶ。典拠である王維「送別」と同様に、この「白雲」は情景描写であると同時に求道する心情の比喩でもあり、良寛は自らの身心の帰着する処が静寂

なる「白雲の陲」であると詠んだのであった。

明治維新後の近代にも、次のような留別詩がある。[19]

（日本近代）夏目漱石「無題　明治三十三年」（『漱石詩注』）

1 君病風流謝俗紛　君病みて　風流　俗紛を謝し、
2 吾愚牢落失鴻羣　吾愚にして　牢落　鴻群を失ふ。
3 磨甎未徹古人句　甎を磨きて　未だ徹せず　古人の句、
4 嘔血始看才子文　血を嘔きて　始めて看る　才子の文。
5 陌柳映衣征意動　陌柳　衣に映じて　征意動き、
6 館燈照鬢客愁分　館燈　鬢を照らして　客愁分かつ。
7 詩成投筆蹣跚起　詩成り筆を投じて　蹣跚として起てば、
8 此去西天多白雲　此の去　西天　白雲多し。

1 君は病を得てから俗塵を謝絶して風流に過ごしているが、
2 わたしは愚かで群から逸れた鴻のように孤独な身となった。
3 敷き瓦を磨いても悟りには至らぬと寒山詩でも云われたが、
4 血を吐くまで至って君は才能あふれる文学を生み出し、それは皆に読まれるのだ。
5 道端の柳の影が衣に映るとき旅行かんと我が心が動くが、
6 宿の灯が鬢を照らせば　見知らぬ地へ旅立つ愁いがわたしと君それぞれの胸に去来する。
7 詩が完成して筆を投げ置き　よろよろと立ち上がれば、
8 わたしが旅行く西方の空にたくさんの白雲が見えた。

作者は近代日本を代表する文豪である夏目漱石（一八六七～一九一六）であり、この詩は漱石が明治三十三年（一九〇〇）に英国留学に行く際、友人の正岡子規（一八六七～一九〇二）に寄せたものである。まず、1句目は子規の、2句目は漱石の現状を詠んで比較しており、3・4句目は1句目の子規の文学創作の様子を古人の寒山の詩と比較しながら描写する。[20]漱石はその文学が読む人の心を打つものと予測し、彼を激励したのである。そして、5・6句目では、2句目で示唆されていた孤独に旅立つ漱石、そして、それを見送る子規の別れの描写となる。古来別れの象徴たる柳の影、煌々と鬢を照らす宿屋の灯が、英国留学への期待と不安、そして、何より離別の哀しみに揺れ動くそれぞれの心を投影しているのである。そして、7・8句目では、西域で手柄を立てんと筆を投げ置いた後漢の班超に倣いつつ、[21]漱石はよろよろと立ち上がる。彼の旅立つ先の西の彼方の空には「白雲」が湧きおこっていたという。

そして、この詩の8句目の「此去西天多白雲（此の去　西天　白雲多し）」が王維「送別」の「但去莫復問、白雲無盡時（但だ去れ　復た問ふこと莫し、白雲　尽くる時無からん）」を意識して詠まれたことを吉川幸次郎氏が指摘しているが、[22]その字句から見て、陶弘景詩の「嶺上多白雲（嶺上　白雲多し）」も念頭にあったであろう。詩の前半において子規が文学に命を捧げている現状を賞賛を込めて詠んでいること、そして、典拠である王維「送別」の「白雲」の表現に鑑みれば、この漱石詩の「白雲」は留学先にて見出せるかもしれない漱石自身の理想となるもの、この場合は生涯の学問や仕事を比喩しており、彼の期待する思いが絶えず湧きおこっていることが窺える。一方で、この留学は自ら望んで行く帰隠ではないため、そこに理想の世界が待っているとは限らなかった。故に、留学前の今はそれこそ「白雲」のように見通しもつ

かず、つかみ所もないために、不安を抱いていたとも見なせる。これについては、7・8句目の「蹣跚」たる足取り、西方の空に見える「白雲」を如何に解釈するかで変わってくるだろう。

また、厳密には王維「送別」が典拠であるとは断定し難いが、王維や良寛の詩の影響が窺える漱石の詩として次の詩がある。

（日本近代）夏目漱石「無題　十一月二十日夜」（『漱石詩注』）

1 眞蹤寂莫杳難尋　　真蹤は寂莫として杳かに尋ね難く、
2 欲抱虚懐歩古今　　虚懐を抱きて古今に歩まんと欲す。
3 碧水碧山何有我　　碧水碧山　何ぞ我有らん、
4 蓋天蓋地是無心　　蓋天蓋地　是れ無心。
5 依稀暮色月離草　　依稀たる暮色　月は草を離れ、
6 錯落秋聲風在林　　錯落たる秋声　風は林に在り。
7 眼耳雙忘身亦失　　眼耳双つながら忘れて身も亦た失ひ、
8 空中獨唱白雲吟　　空中に独り唱ふ　白雲の吟。

1 ほんとうの道とは物寂しく杳として求めがたいもの、
2 故に虚心をもって昔から今までその道を歩こうとしたのだ。
3 澄み切った緑の山河には我欲など微塵もなく、
4 世界を覆う天も地もただ無心である。
5 おぼろなる夕暮れの景色に月は草の上から離れゆき、
6 入り乱れる秋の気配に風は木々の間を駆ける。
7 目も耳も感じられなくなり、身体の感覚も失われゆく中、
8 私は空に向かって一人白雲の詩を唱う。

1・2句目では「真蹤（ほんとうの道）」を求めて歩き続けた己の人生を振り返り、3・4句目ではそこで見出した境地を詠む。それは澄み切った碧い山河と世界を覆う天地、それら自然（天）の我欲や私心を取り去った在り方、即ち「則天去私」であった。5・6句目は病に冒されながらも夕暮れから夜への自然の移り変わりを何とか知覚せんとしていたのだろうか。そして、7・8句目において、病のために視覚・聴覚をはじめとする感覚が次第に薄れていく今この時、漱石は空に向かって「白雲」の詩を歌うことでその「則天去私」の境地に至らんとする。彼は、最期まで歩みを止めなかったのであった。

吉川幸次郎氏がこの5・6句目について「この聯、すでに鬼気を感ずる」とし、7・8句目を以て「十四字、二句の後の逝去の予言となった。いわゆる詩の讖を成すものである」と述べるように、[22] この詩は大正五年（一九一六）十一月二十日夜に詠まれたもので、かの未完の作となった『明暗』とともに漱石の絶筆である。漱石はこの詩を詠んだ翌々日の十一月二十二日に倒れ、十二月九日に帰らぬ人となった。

この漱石詩の8句目に見える「白雲吟（白雲の吟）」についても諸説があるが、[23] ここでは、漱石詩の「白雲」が王維「送別」をはじめとする先人の詩の系譜の中で詠まれていることに着目したい。つまり、「白雲吟（白雲の吟）」とは、王維や良寛等の詩の如く、「白雲」、即ち自らの理想たる自由で静寂な境地をひたすらに求める詩歌のことであり、[24] それを吟ずることで漱石は「則天去私」の境地に自らを送らんとしたのである。そして、漱石が求め続けた「則天去私」は、特に彼の漢詩においては「白雲」に象徴されており、更にこの漱石最後の詩には、奇しくもこの世からあの世に自らを送る「予言（讖）」も含まれていたのであった。

終わりに

「はじめに」でも述べたが、国語の漢文教育では①白文を②訓点に沿って③訓読（書き下し）し、④語句や語法を学んで読解し翻訳することで終わることが多いが、その読解において様々な工夫を行い、かつ、(E)～(G)などの別の作品もあわせて読むことによって、より深い読解が可能となる。

(E) 同じ作者の同じ主題の作品をあわせて読み、比較する
(F) 関連する作品をあわせて一緒に読む
(G) 影響を受けた後世の作品をあわせて一緒に読む

今回、王維「送別」を教材とし、「はじめに」で挙げた(A)～(D)の方法を応用しながら、(E)～(G)の方法を行うことを考えたが、これらは他の漢詩教材にも応用できよう。

また、これらの方法については、時に内容的に連関するので、組み合わせることもまた手段の一つである。即ち、教材となった漢詩文を(D)その典拠や(E)同じ主題の作、(F)関連作品など様々な角度から分析して読み解いた後に、(G)後世の文学作品に及ぼした影響、特に日本における受容とそこから生まれた作品も鑑賞するといったことである。優れた漢詩文の持つ普遍的な主題や発想力を読み解くのみならず、かかる知識を積極的に受容し、かつ、自らの創作にも活かした日本の文人たちの柔軟性や表現力を改めて学ぶ機会にもなろう。

【注】

(1) 拙稿「漢詩教材研究―李白「山中問答」を読み解く―」（『金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要』第十号、二〇一八年）。

(2) 王維の詩については『王右丞集』（四部叢刊）および『王右丞集箋注』（上海古籍出版社、一九九八年）を参照。後者を底本とする。王維詩の訳注や解説は主に以下の書を参照。
①都留春雄『王維』（中国詩人選集6、岩波書店、一九五八年）
②小林太市郎・原田憲雄『王維』（漢詩大系10、集英社、一九六四年）
③小川環樹・都留春雄・入谷仙介『王維詩集』（岩波文庫、一九七二年）
④伊藤正文『王維―審美詩人』（中国の詩人―その詩と生涯5、集英社、一九八三年）
⑤石川忠久『漢詩を読む　王維一〇〇選』（NHKライブラリー、日本放送出版協会、二〇〇七年）

(3) 王維「送別」は『唐詩選』巻一所収。また、筑摩書房『古典B　漢文編　改訂版』に採用されている。

(4) 前野直彬『唐詩選（上）』（岩波文庫、一九六一年）四二頁～四四頁。

(5) 王維「歸輞川作」（『王右丞集箋注』巻七）は、王維が終南山の別荘である輞川荘に帰るときの作である。

谷口疎鐘動　谷口疎鐘動き、
漁樵稍欲稀　漁樵稍く稀ならんと欲す。
悠然遠山暮　悠然たり遠山の暮、
獨向白雲歸　独り白雲に向ひて帰る。

菱蔓弱難定
楊花輕易飛
東皐春草色
惆悵掩柴扉

菱の蔓は弱くして定まり難く、
楊の花は軽くして飛び易し。
東皐春草の色、
惆悵柴扉を掩ふ。

(6) 王維「送元二使安西」は、中学校教科書の学校図書『中学校　国語3』、高等学校教科書では、教育出版、三省堂、桐原書店、筑摩書房、数研出版、第一学習社、大修館書店、東京書籍、明治書院等の『国語総合』の教科書に採用された定番教材である。教科書は「裏」を「浥」に作ることがあるが、同じ意味である。『樂府詩集』巻八十「渭城曲」では「浥」に作る。

(7) 注(2)の⑤石川忠久『漢詩を読む　王維一〇〇選』二二〇頁～二二二頁。

(8) 吉川幸次郎・三好達治『新唐詩選』(岩波新書、一九五二年)一三五頁～一三九頁に王維の「送別」と「送元二使安西」を解説。この王維の性格についての記述は「送元二使安西」の解説において見える。また、『新唐詩選』の一二一頁～一二三頁には、王維「終南別業」も「入山寄城中故人」と題して解説している(注(17)参照)。

(9) 注(2)の③小川環樹・都留春雄・入谷仙介『王維詩集』一五七頁～一五八頁。

(10) 王維「送孟六歸襄陽」は元来『王右丞集』には未収録で、『文苑英華』巻二六八に収録されている。注(2)の④伊藤正文『王維―審美詩人』一六四頁～一七三頁および⑤石川忠久『漢詩を読む　王維一〇〇選』二〇一頁～二〇九頁に王維と孟浩然の交遊について言及されており、この別れ際の応酬の詩もともに解説されている。

(11) (六朝梁)陶弘景「詔問山中何所有、賦詩以答」は『太平廣記』巻二〇二「儒行」にも収録されている。また、(東晋)陶淵明「歸去來兮辞」(『陶淵明集』巻五)にも「雲無心而出岫、鳥倦飛而知還(雲は無心にして岫を出で、鳥は飛ぶに倦みて還るを知る)」とあり、隠棲した山の峰から雲が湧き出ているという。

(12) 目加田誠『唐詩選』(新釈漢文大系19、明治書院、一九六四年)一八〇頁～一八一頁。

(13) 陶淵明「飲酒二十首」其五は大修館書店『古典B　改訂版漢文編』および『精選　古典B』、三省堂『高等学校　古典漢文編　改定版』、明治書院『新　精選古典B　漢文編』等に採用されている。

(14) 松枝茂夫・和田武司『陶淵明全集(上)』(岩波文庫、一九九〇年)二〇八頁～二〇九頁。

(15) 松浦友久『中国名詩集―美の歳月』(朝日文庫、一九九二年)四六六頁～四六九頁。

(16) 松原朗「自送の詩―王維「送別」詩論考―」(『中国詩文論叢』第20集、中国詩文研究会、二〇〇一年)、後に同著『中国離別詩の成立』(研文出版、二〇〇三年)に収録。後者の著書から引用。

(17) 王維「終南別業」は『國秀集』巻中において「初至山中」として収録されている。『河嶽英靈集』巻上、『文苑英華』巻五七〇、『唐文粹』巻十六下にも収録されており、そこでは「入山寄城中故人」と題する。

(18) 良寛の詩は、①東郷豊治編著、鈴木虎雄・堀口大学校閲『良寛全集』上巻(東京創元社、一九五九年)および②入矢義高訳注『良寛詩集』(東洋文庫七五七、平凡社、二〇〇六年)、③内山知也・谷川敏朗・松本市壽編集『定本良寛全集』第一巻詩集(中央公論社、二〇〇六年)を参照。③を底本とした。

(19) 吉川幸次郎『漱石詩注』（岩波文庫、二〇〇二年）一〇一頁～一〇三頁。

(20) 「磨甎」の故事は夏目漱石『吾輩は猫である』第九章にも登場し、元々は唐の禅僧である南岳懐譲と馬祖道一の挿話で、『江西馬祖道一禪師語錄』や『正法眼藏』「古鏡」などに見える。寒山がこれを踏まえて詠んだのが、次の「詩三百三首」其九十七である（『寒山詩』、『全唐詩』巻八〇六）。

蒸砂擬作飯　砂を蒸して擬して飯と作し、
臨渴始掘井　渴に臨みて始めて井を掘る。
用力磨碌甎　力を用ひて碌甎を磨くも、
那堪將作鏡　那ぞ將て鏡と作すに堪へん。
佛説元平等　仏説は元もと平等、
總有眞如性　総て真如の性有り。
但自審思量　但だ自ら審らかに思量するのみ、
不用閑爭競　閑に争ひ競ふことを用ひざらん。

(21) 班超（三二～一〇二）は後漢の武将で、『漢書』を著した班固の弟である。西域に派遣され、西域の諸国を服属させて西域都護となり、定遠侯に封ぜられた。「投筆」の故事は、『後漢書』巻四十七の「班超伝」に見える。

班超字仲升、扶風平陵人、徐令彪之少子也。爲人有大志、不修細節。然内孝謹、居家常執勤苦、不恥勞辱。有口辯、而涉獵書傳。永平五年、兄固被召詣校書郎、超與母隨至洛陽。家貧、常爲官傭書以供養。久勞苦、嘗輟業投筆歎曰「大丈夫無它志略、猶當效傅介子・張騫立功異域、以取封侯。安能久事筆研閒乎。」左右皆笑之。超曰「小子安知壯士志哉。」

班超　字は仲升、扶風平陵の人、徐令彪の少子なり。為人大志有り、細節を修めず。然るに内に孝謹にして、家に居りては常に勤苦を執り、労辱を恥ぢず。口弁有りて、書伝を渉猟す。永平五年、兄の固召されて校書郎に詣り、超と母とは随ひて洛陽に至る。家貧しくして、常に官の為に傭書して以て供養す。久しく労苦し、嘗て業を輟め筆を投じて歎じて曰はく「大丈夫は它の志略無くんば、猶ほ当に傅介子・張騫に效ひて功を異域に立て、以て封侯を取るべし。安んぞ能く久しく筆研の間を事とせんや」と。左右皆之を笑ふ。超曰はく「小子安んぞ壮士の志を知らんや」と。

(22) 注(19)の吉川幸次郎『漱石詩注』の「多白雲」の解説に「『唐詩選』の王維の詩に、南山に帰臥する友人を送って、「但だ去れ復た道うなかれ、南山白雲多し」。白雲は清潔さの象徴。前の詩の「江山満目悉吾師」が、この詩ではこの三字となったとも見られるが、単に自然の白雲のみでなく、西洋の人文にうずまく白雲をも含意するかも知れない」とある。

(23)(24) 注(19)の吉川幸次郎『漱石詩注』三〇一頁～三〇二頁。夏目漱石の漢詩と「白雲」については先行研究も幾つかあり、④の論述を基に列挙する。

①渡部昇一「白雲郷と色相世界―夏目漱石の漢詩論―」（『比較文学』11巻、日本比較文学会、一九六八年）。後に同著『漱石と漢詩』（英潮社出版、一九七四年）に収録。

②佐古純一郎「漱石の漢詩文」（三好行雄等編、講座夏目漱石第2巻『漱石の作品（上）』、有斐閣、一九八一年）。

③祝振媛「漱石の漢詩文―〈白雲郷〉を中心に―」（『国文学　解釈と鑑賞』66(3)、至文堂、二〇〇一年）

④藤田智章「漱石詩における「白雲」のイメージについ

て」（『二松　大学院紀要』第19集、二松學舍大学大学院文学研究科、二〇〇五年）

(25) 漱石には良寛詩を意識した「無題三首　十月二十二日」其二があり、ここから漱石は良寛詩も知っていたことが判る。

注(19)の吉川幸次郎『漱石詩注』二九三頁～二九四頁。

元是東家子　元是れ東家の子、
西隣乞食歸　西隣乞食して帰る。
歸來何所見　帰り来たりて　何の見る所ぞ、
舊宅雨霏霏　旧宅　雨霏霏たり。

※本稿は令和元年度前期に金沢大学人間社会学域学校教育学類にて「漢文学演習A」および「国語科カリキュラム研究Ⅰ・Ⅱ」として開講された授業の成果の一部であり、また、平成二十九年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究（B）「東アジアにおける蘇軾「和陶詩」の受容と発展に関する研究」（課題番号：17K13430）の交付を受けた研究成果の一部である。